



書評 : 朴宣美著『朝鮮女性の知の回遊』(山川歴史 モノグラフ10)

木村, 幹

(Citation)

日本歴史, 712:123-125

(Issue Date)

2007-09

(Resource Type)

article

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90000497>



書評・「朴宣美『朝鮮女性知の回遊』（山川歴史モノグラフ 10）」

日本統治期の朝鮮半島について、当時の朝鮮半島から内地への女子留学生を通じて考える。表題の一部として採用されている「知の回遊」という、魅力的なフレーズと併せ、本書は一見、これまでの日本植民地研究とは色合いを異にする、現代的で論争的なテーマを取り込んだ、新しいタイプの研究であるかのように見える。日本統治期の「ジェンダー論」に注目し、その対象として「ミッションスクール」を選び、留学生の「メトロポリス」志向に着目する。こう書くと本書は確かにその書籍の帯に書かれているように、「先端的でオリジナル」で華やかな著作であるかのように見える。

しかし、本書を紐解く読者は、このような本書の外見に惑わされてはいけない。何故なら、一旦、そのページを紐解けば明らかなように、本書は、そのような「華やかな」分析のフレームワークにはにつかわないほどの、愚直とも言えるほどの、地道な実証研究を基礎に書かれている著作だからである。

例えば、その構成である。本書は、序章と最終章を併せて、全九章からなっている。その章構成は次のようである。

序章 植民地期における朝鮮人女子日本留学生研究の視点

第一章 朝鮮総督府の留学生政策

第二章 朝鮮人日本留学の状況

第三章 留学生の日本留学に対する認識

第四章 女子留学生の日本での経験 ― 植民地出身女性としての自己認識を中心に

第五章 帝国の伝道師柳原吉兵衛と女子留学生の「植民地的遭遇」

第六章 女子留学生の近代的な「知」の獲得 ― 家政学を中心に

第七章 女子留学生の帰国後の役割 ― 「良妻賢母論」の普及を中心に

終章 朝鮮女性の日本留学とは何だったのか

この構成からもわかるように、本書の大部分、具体的には、第四章と序章、最終章を除いた部分は、既に筆者が公表済みの論文を基礎としている。従って、まず、本書が一つの著作としてまとまりを欠くことは、ある程度やむを得ないことであつたかも知れない。評者も自身経験があるように、公表済みの諸論文を基礎にして、一つのまとまりある著作とすることは確かに、容易なことではない。しかしながら、同時に重要なことは、本書が本当に序章で述べるように、日本統治期という「重層的で矛盾に満ちた実体」を明らかにしようとするのであれば、やはり、自らが研究の対象としている人々や事例が、当時の社会においてどのような重みを持って現れていたかを、明確に位置づける必要はあつたように思われる。就中、第四章の女子留学生と、第五章の柳原吉兵衛の事例については、それは顕著である。筆者が自身明らかにしているように、一九四〇年代にもなると、朝鮮半島が

ら内地への留学生は毎年二万人以上、女子留学生も三千人近い数に上っており、各々の事例の位置づけがわからなければ、本書に挙げられている事例をどのように理解してよいかは、少なくとも評者のような当時の女子留学生に関する知識を持ち合わせない読者には、少しわかりづらい。

勿論、評者がこのように言うのには理由がある。それは、本書に引用されている事例そのものが、実に魅力的であるからである。例えば、第三章や第四章の各所に引用されている、当時の留学生の回想は、彼女らにとって、高等教育や、内地の社会、更には、内地で受けた教育がどのように映っていたかを示す上で、極めて興味深い。これらの事例は、確かに筆者が言うように、従来の「日本の支配と朝鮮民衆の抵抗」という図式から見えない、日本統治期の朝鮮半島の何かしらを鮮やかに我々に提示してくれる。

なものであったかを示す上で、興味深い。

第六章、及び、第七章も同様に興味深い。ある時期までの家政学が女性の家庭内の役割を近代化するものであると同時に、女性を既存の社会体制の中に組み込む為のイデオロギー的性格を有していたことは、今日では広く知られた事実であり、日本統治期の朝鮮半島でも同様の役割を果たしたことは、容易に想像できる。その意味でこれらの諸章の内容は、斬新的ではないにしても、確かに当時の女子高等教育が持つ何かしらの意味を明確に提示している。

何れにせよ、これらの本書の中核というべき実証部分において、本書は高く評価できる、「おもしろい」著作である。しかしながら、本書が序章で述べている、日本統治期という「重層的で矛盾に満ちた実体」を明らかにする著作としては、まだ幾つかの視点が欠けているように思う。思いつくままに述べるなら、まず、日本統治期の留学については、もう少し、当時の朝鮮半島における教育制度を踏まえて議論することが必要であったろう。この点において、重要なのは第二次朝鮮教育令以前と以後では、朝鮮半島の教育制度が異なること、そしてだからこそ、彼女らの教育を受ける機会も違ったことである。「植民地支配の本質」も去ることながら、当時の彼女達の前にどういう機会がありどういう機会が無かったかを踏まえておけば、彼女らの回想はより意味のあるものになったろう。また、同様の理由により、三十五年に及んだ日本統治期を明確な時代区分をすることなく議論していることもどうかと思う。留学生の数にしても、年間数万人が留学する一九四〇年代と、千人以下に過ぎなかった一九一〇年代では全く留学の意味が異なる筈である。社会階層も重要であろう。明らかなことは、本書で引用される留学生の証言の多くが、同時期の日本人学生と比べてもより強い、エリート色を有していることである。この点についても分析を行うことができれば、彼女達、「エリート女性」の存在が朝鮮半島の社会にどのような影響を与えたかをより明確に示すことができたであろう。

そして、これらの点をも踏まえた時、本書で引用されている数々の事例は、より輝きを以て見えてくるに違いない。残念ながら筆者は、その終章において、これらの「重層的で矛盾に満ちた」事例を「帝国の文化支配装置としての留学」という、古い「日本の支配と

朝鮮民衆の抵抗」の枠組みに押し込んでしまっている。その突破口を開く一つの方法は、彼女達、日本統治期の内地留学生達が、解放後にいかなる役割を果たしたかを明らかにすることであるかもしれない。本書が、「おもしろい」著作であるが故にこそ、惜しいと思う。筆者の続く研究の進展を強く期待したい。